



発行：NPO法人とよなか市民環境会議『アジェンダ21』  
編集責任者：奥野 享  
事務局：豊中市環境情報サロン内  
〒561-0804 豊中市曾根南町1-4-3  
Tel：06-6863-8792 Fax：06-6863-8734

この号のハイライト

P. 1 環境賞大賞 / P. 2 ヒト・外観  
察会、ガム調査 / P. 3 とよっぴー  
キッズ倶楽部 / P. 4 環境塾エコ  
ツアー / P. 5 環境自治体指指会  
議 / P. 6 寺子屋工房 / P. 7 環境  
政策室 / P. 8 出前講座

2006年(平成18年)9月号 NO. 16 (通巻第34号)

## 大阪府から環境賞大賞を受賞する

大阪府は毎年環境への負荷低減などに寄与した団体に賞を贈っていますが、その中の府民活動部門で私たちアジェンダ21が今年度の大賞を受賞しました。

表彰式は6月27日の午後には大阪府職員会館多目的ホールで行われました。新開悦子理事長と井上和彦事務局長、

茨木かづ子副理事長、宮田健理事が出席し、井上事務局長がこれまでの活動経過

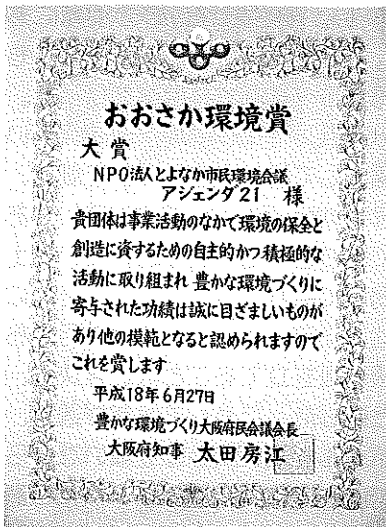
を報告、写真のような賞状と楯が新開理事長に手渡されました。それぞれ環境情報サロンに飾ってあります。

なお大賞の受賞理由としては次のような説明文が添えられていました。

「NPO法人として市民・事業者・行政のパートナーシップを基本とした環境に配慮した暮らしの普及実践活動、事業者による環境配慮の促進活動や生ごみの堆肥化を通じた循環型社会の促進活動は、自主的・自立的かつ継続的に実践されており、高い実績を有している。こうした活動は、行政の環境施策にも大いに貢献し、また行政と市民の協働により豊かな環境を構築していく上での先駆けであり、他の模範となる活動で大いに評価できる。今後の更なる発展を期待する」

その他、今年度の受賞団体は、環境大賞の事業活動部門に積水ハウス株式会社が、また特別奨励賞の府民活動部門には全大阪消費者団体連絡会及びなにわの消費者団体連絡会が受賞し、それ以外にも奨励賞などがあり府民活動部門・事業活動部門を合わせて11団体の受賞がありました。

(奥野)



## アジェンダ21 定期総会を開きました

アジェンダ21の2006年度総会は、6月21日15時20分から、とよなか市民環境会議総会に続いて開催しました。出席会員62人、委任状78人で合計140人、会員数は177人ですから総会が有効に成立していることを確認、議長に花と緑のネットワークの江藤なるみさんを選出して議事にはいりました。

とくに新年度は環境学習への積極的な取り組みがあり、配布した「環境学習リスト」により、すでに具体的に依頼を受け



規約一部改正で採決

## ヒメボタル観察会に協力 自然部会

6月3日(土)夜、野畑図書館を拠点に恒例のヒメボタル観察会が催された。今年も百人余りの参加者があり盛況のうちに午後9時過ぎ最後の観察者が家路についたのを見届けて終った。

会が始まったのは午後6時45分。公園みどり推進課・四家さんの挨拶に続き、那須野さんのヒメボタルについての話。光の出し方、住む場所、食べる物、体の大きさ等をゲンジボタル、ハイケボタルと比べて話され、何故ヒメボタルを大事に守らなければならないかと環境の大切さでまとめられた。

続いて岸田さん、手作り紙芝居を絶妙な語り口で自作自演され、集まった子どもたちや大人も熱心に聞き入っていた。

館での行事の最後は、ホタルの置物づくりのワークで、部品をボンドでくっつけ、最後はマジックで色付けして終るというもので、約20分ほどで全員が完成した。

午後8時過ぎから、今日のメインの観察会に4班に分かれて順に出発した。さて、今年のヒメボタル観察はどうであったか。結論から言えば、昨年より大幅に増加し、参加者も主催者も満足する結果であった。これは一概には言えないが、ヒメボタルを守るために、関係者がいろいろと苦心を重ねた結果だと思う。私たちがヒメボタルに関わるようになったのは、ヒメボタルの観察会が開かれることになり、これに参加したのがきっかけであった

ように思う。当時ヒメボタルが生息する竹やぶは惨たんたる有り様で、立ち枯れた竹が縦横に倒れ掛かり、足の踏み場もない状態で、誰が見ても荒れるがまま放置された竹やぶであった。これではいくらヒメボタルの保護のためとはいえ一般の市民の理解を得ることは出来ないと思われた。しかし、担当者によると、既に3年間



も、ある団体に委託して、整理しているという話であった。我々なら3年間あれば、もっと手際よく処理できると思い、竹林の整備に取りかかることにした。作業や処理については、ヒメボタルを守る会の人たちとも話し合い、伐った竹は現場で処理しクリーンランドへは持ち込まない。その方がCO2削減にも、竹やぶの湿気を保つのに役

立つということで、毎年3~4回竹林整備を行った。竹林は次第に明るさを取り戻し、竹以外の植物も増えていった。その後、市民農園として貸し出されていた畑が、市民農園でなくなり、その跡地利用についてもいろいろあったが、結局今の状態で落ち着いた。耕作されていた土地を放置すると非常な勢いで原野に返っていく。そこに心ない人たちがごみを捨てる等、良くないことも目立ち始めた。話し合いの結果看板を立てることなどを決め、伸び放題の草も刈ることにした。こうして2年が過ぎ、来年もたくさんのヒメボタルが飛び交うの願いながら、今年また草刈りや竹林整備の時期を迎える。(山口壽)

## ツバメ営巣調査説明会と観察会 自然部会

市民協力のもと5年ぶりに、豊中におけるツバメの営巣とヒナの繁殖調査を行うこととなりました。5月13日に教育センターで説明会を実施し、33名に協力をいただきました。市内を50メッシュに分けて行います。

ツバメは3月には豊中にも渡来します。巣作りから産卵、ヒナが生まれて巣立ちするまで約6~7週間を要します。観察のコツは巣作りに1週間、抱卵に2週間、子育てに3週間各前後です。毎年ツバメを呼ぶには自然が豊かなこと即ち土面、草木、水辺があってエサとなるユスリカ、カゲロウ、トンボ、チョウ、ハチなど沢山の虫が必要となります。



さて、ツバメ調査は1回だけで終了というわけにはいかず、ヒナが無事に巣立ったか何回か通って確認をします。2度目の産卵があれば、延べ3カ月にも及ぶので関心を持ち続ける忍耐も要ります。

二番子は7月いっぱい見られずので見落としのないようにチェックが欠かせません。皆さんには5月中にまず一度観察に行かれるようお願いして説明会を終えました。

説明会后、雨のなか、会場近くにある巣を見学に行くと、1つは抱卵中でもう1つにはすでに大きく成長して巣立ちが間もないヒナ4羽を観察しました。

(三宅史郎)

## たまねぎ収穫体験

6月29日、今日は暑い中たくさん子どもたちが、9時すぎから11時30分まで、順番に緑と食品のリサイクルプラザを訪れてくれました。

原田小学校4年生、まちづくり人権センター保育所の子どもたちは徒歩で、泉丘小学校4年生、蛍池保育所、西丘保育所の子どもたちはそれぞれバスで、あわせて310人の子どもたちと先生方…。

まずプラザの施設を見学してもらい、プラザ横の畑で育てている作物を見てもらいました。畑では、今、じゃがいも、きゅうり、トマト、なす、とうもろこし、大豆、さつまいもが育っています。じゃがいもやトマトは知っている子どもが多かったようですが、大豆は



## 花と緑のネットワーク

なかなかわからないようでした。でも、もうこれからはわかるね！

そして、原田小学校4年生、蛍池保育所、西丘保育所、まちづくり人権センター保育所の子どもたちは、自分たちの給食で使う玉ねぎを収穫しました。この玉ねぎは、箕面市萱野で昨年種を播いたものの、農園が3月末で終了するというので、急ぎよ11月に豊中へ引越したものです。

原田小学校の子どもたちは1人3個収穫して、1個はおうちへのお土産。あとの2個は給食（原田小学校は自校給食）で使えるよう、学校へ帰ってから子どもたちが葉や根を落としたり手入れをして、早速翌日の給食に登場しました。献立はチンジャオロースーと豆腐の澄まし汁で、玉ねぎがたくさん入っていたにもかかわらず、残りはほとんどなかったそうです。

ちょうどその日にPTAのお母さん方の給食試食会も企画されていて、参加された方へこの玉ねぎの話もしていただけたそうです。

保育所の子どもたちは1人1個ずつ収穫し、一部はスライスしてその日の給食に登場、残りは吊るして保存し、後日カレーなどの食材に使われたとのこと。それにしても、玉ねぎって収穫まで10カ月近くかかるのですね。そう思うと、今まで以上に、玉ねぎを食べる時に愛情がわきそうです。（村瀬令子・高島邦子）

## 老人会東部婦人部の呼びかけで堆肥化講習

堆肥化講習を定期的に行っているが、老人会東部婦人部の役員さんからの呼びかけで、各々の地域で講習会を開催することになった。6月24日(土)の千里老人センター(28名)を皮切りに、7月21日(金)には千里南町センター(11名)、7月22日(土)には千里の朝日プラザ(18名)で出前講習会を行った。後で見学させてもらったが、一坪農園の方も参加されていた。それだけに質疑応答が活発だった。

まず段ボール堆肥の実物を見て温度が熱くなっていたのに全員ビックリされた。魚の骨は1日でなくなるが、鶏の骨はいつまでも残るとの説明に信じられないとのことであった。池田さんが魚の骨の絵を描いて、背骨も頭もバラバラになるとの説明で納得の様子だった。

ハエの発生はメンバーの池田さんがノートを見せながら、配合数字をはじめ詳細報告と、まだ発生したことはないとの説明にうなずきみられた。醗酵が完全管理状態で産卵が完全防止されればウジはわからないが、現実にはウジの発生に悩まされる。対処法は生ごみの



投入を止めて乾燥させる方式を勧めた。

またとよっぴーの肥効についての意見交換があったが、ネットワークの20年30年にわたる循環の考え方と、園芸家としての現在の花をどう育てるかの立場の違いがあることが相互理解された。相互理解こそ市民活動のキーポイントだと認識した次第である。

(浅井 正)

## 環境塾エコツアー「パンとマーガリンの一生&手のひら温度計」

7月31日 32人(スタッフ含む)

長い梅雨が明けた7月の末、環境塾エコツアーを開催しました。朝から曇り空、環境塾後半の手のひら温度計が成功するか心配しながら、最初に見学する敷島製パン豊中工場へ出発します。

到着すると食品会社ならではの仕組みが、扉が二重で交互に開閉します、これは蟻等が

工場内に入らない仕組み。トイレに入ると自動扉が閉まりますが、手を自動殺菌器に入れないと扉が開きません、衛生的ですが、子どもが一人でトイレに行き、帰れなかったこともあるそうです。

さて見学は、クロワッサンができるまでの仕込み・ねかし・発酵・焼成・冷却・包装・金属チェック、と全工程は15時間かかりますが、会議室でビデオを見て、それから30分程度で見学します。コースは人が来ると、センサーが働き照明が点き、人が去ると消える省エネの工夫がされていました。見学が終わると、できたてパンの試食。時間が無いために口に頬張りつつ次のマリンフードへ。(もう少し食べたかった！)

マリンフードでは、マーガリン・ホットケーキを作っているラインを、手の届く距離から見学できました。



もちろん、こちら食品工場のため、見学者は白衣・マスク・帽子の着用が必要です。帽子から髪の毛が出ていると見学できません。入り口ではコロコロ(粘着性ローラー)を使い白衣のほこりを取る念の入れよう。(さすが、食品会社)

説明中にホットケーキをラインから取り上げ、「さあ、出来立てですよ」と渡されたアツアツのホットケーキの美味しいこと。見学者の質問では「企業として環境に配慮している具体例は？」が光っていました。

さてツアーも最終段階。天気も曇り空から夏の青空に変わっており、手のひら温度計を体験するために、住吉神社に向かいます。ここでスタッフから突然の報告「みなさん、うれしい報告をします。運転手さんが、みんなが見学をしている間、こんなに暑いなかバスのクーラーを止めて、外の日陰で待っていてくれたんで

す」(ありがとう、暑かったでしょう)

住吉神社ではいろいろな物を触って、熱さを体験します。「右の狛犬の方が熱いです」「鳥居の前と後ろでは熱さがちがうよ」「マンホールが一番熱いよ」温度計を使い、

手のひらと比較。アスファルト37.5度、日なた35度、木陰31度、木の根っこ付近27度、打ち水をするともっと涼しくなりました。

帰りのバス、疲れて寝てしまった子どもの顔。「今日は楽しかった？大人になっても覚えていてね。豊中の青い空がずっと続くように」気持ちよい疲れが、体をつつみ始めました。(池田一夫)

## とよなか消費者協会が環境大臣賞を受ける

とよなか消費者協会(会長谷口佳以子さん、市民環境会議の副会長)が6月12日地球環境保全功労者として環境大臣の表彰を受けました。

とよなか消費者協会は、これまで40年の活動の中で牛乳パックや食品トレイ、ペットボトルの回収運動など数々の地道な運動を続けてきました。

谷口会長は次のように語っています。「とくに、創立して間もなく始めたトレイの過剰使用追放運動をはじめとした多くの活動は、地球環境への配慮のための運動として大阪府内の消費者団体をリードしてきました。それらの実績が評価されたものでしょう。地道な活動を今後も継続し、次世代の子どもたちに安全・安

心なくらしを継承していけるよう努力していきたいと念願しております」

今回の環境大

臣賞に副賞として贈られた「もったいない風呂敷」は、小池百合子環境大臣がプロデュースし、伊藤若冲の「池辺群虫図」を描いたもの。また併せて贈られた置時計はウイスキーの樽の榎目材をリサイクルしたものが枠に使われていて、いずれも心の込められたものでした。(奥野)



広報公聴課提供

# 環境自治体会議・指宿会議に参加して

## 不便さもぜいたくに感じる

温泉、かつお、開聞岳、焼酎、ソラマメ、さつまいも、アコウにオクラにアロハシャツ。鹿児島県指宿市の魅力はこれだけではありません。指宿の魅力を存分に満喫でき、更に環境自治体会議で様々な人と話し合うことができ、充実した3日間でした。

一日目は全体会としてドイツと韓国、アメリカの地球温暖化防止の取り組みについて話を聞きました。そして、指宿の田原迫市長や他の温泉観光地の市長の話。それぞれの自治体が地域の特長を活かしています。その中で田原迫市長の「不便さをぜいたくに感じるように」という言葉が印象的でした。最近は24時間営業・操業のところが増え、いつでもインターネットで書類を送ることができ、確かに便利になり「待つ」ということが苦手になってきていると思います。不便なところでは、急いでも仕方がないので時間がゆっくり流れます。それを贅沢だと感じる事が地域の活性化につながるということでした。

2日目は11の分科会に分かれ、私は「環境学習」の分科会に参加しました。初めにフィールドワークとして、移植されたアコウという巨樹を見に行きました。初めは海岸沿いに生えていたのですが、台風で倒れたため、それを市民主導で移植を行ったそうです。市民が地域の財産を守るために様々な人を動員し、協力しあうことで環境に対する意識が広がったようでした。

つづいて、「時遊館COCCOはしむれ」という歴史博物館の講堂でワークショップを行いました。その中で、コーディネーターの方が言っていた「100年前を考えることができる人は100年先も描くことができる」という言葉が印象に残っています。

3日目は午前中に全体会があり、各分科会のまとめ

を聞き終了しました。わずか3日間でしたが、環境問題と地方自治体の深いかかわりを再認識しました。

(瀬島奈保子)

## 地熱発電=クリーンエネルギー

24日午後 全体会議、25日 分科会、26日 全体会議。24日の全体会議のテーマは「環境自治体ネットワークの国際交流」なるものでしたが国際交流とは名ばかり、韓国とドイツのパネラー2人だけというお寒いことでした。京都議定書にも、サインしていない韓国のパネラーが自国の取り組みを誇らしげに報告するのは、マアご愛嬌ですか？ でも、できることなら先進事例の話をもっと聞きたかったと思いました。またドイツのパネラーはちょっと理解しがたい気候同盟なる構想をもちだしていました。コーディネーターは不慣れと遠慮からか、パネラーに何の質問もせず、有難うございましたと礼をいうだけ。準備不足、人材不足でしょうね。また問題のアメリカの出席がなく、私にとっては不満だらけでした。

25日の分科会「脱温暖化社会を目指す地域コミュニティと市民事業」のフィールドワークでは「すめ」という温泉熱を調理に利用して、暮らしのなかに自然を取り込んでいる様子を垣間見る事ができました。山川地熱発電所では、全く二酸化炭素を出さない地熱というクリーンエネルギーでの発電は、高く評価できると思いました。パネルディスカッションでは各地の取り組み方の報告がありました。この中では行政の助成金の有無が論点になり、盛り上がり、面白かったです。

全体的には地方色が出ていたと言えばその通りですが、今後の開催地でのアイデアと力量が面白くするかどうかですね。次回の開催地は愛媛県の内子町、どんな会議になるのか興味津々です。(山本敏次郎)

## 環境とわたし

⑩

### 桑島いつ枝さん 竹炭プロジェクト



山の四季に憧れ、50代から仲間と近隣の山に登ることが続いた。山道で出会う素朴な野草にひかれ、山を抱え込むように根を張る巨木に驚き、大自然に包まれ、まさに命の洗濯をする日々。人間は自然の大地に守られていることを実感していた。

その頃、何気なく手にとった広報で、とよなか市民環境会議が始動し、その中で豊中の自然環境を考える活動も始まったことを知った。背中を押され、躊躇なく自然部会の活動に参加することを決めた。

自然に「親しみ、学ぶ」「守り、育てる」「創り、広げる」の3つの柱は市民一人ひとりが自然環境を

身近に考えていく道しるべになると思った。日常活動の植物調査、生物調査に参加して、いま豊中の自然環境が年々悪化していることを実感する。また持ち主の高齢化で手入れの出来ない竹林では開発が進み、緑の喪失も加速している。が、荒れた竹林の間伐を続けていると、かつてそこに在った植生が蘇り雑木も竹も元気になることが分かる。こうした体験を通して、自然環境保全へのメッセージを送り続けたい。

### 8月は粗大ごみ収集有料化についての学習会

生活部会では、6月から寺子屋工房の名称で学習会その他の活動を推進することとし、まずは6月30日にクリーンランド・下水処理場・緑と食品のリサイクルプラザの見学会を、参加者12人で実施しました。

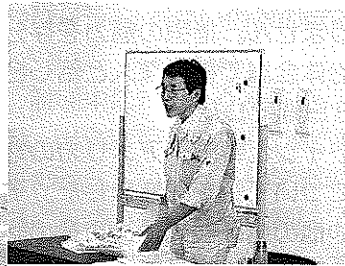
第2弾としては8月9日10時から、リサイクル交流センターで粗大ごみ収集有料化実施について、減量推進課の池田一夫さんに講師をお願いし学習会を開きました。当日の参加者は20人で内容は次のようなものでした。



平成16年にごみ袋の有料化が実施され、それに次ぐ措置として以前から予定されていたものでした。でも、ごみ袋有料化のときと違い粗大ごみの場合は、他都市の事例も聞いていたので慎重に態勢作りをしなければなりませんでした。

有料化実施の情報を発表するとともに、駆け込みで粗大ごみが出されるのは当然予想して、電話受付の人数を増やす用意はしていました。出発は10人体制で、6月には11人に。でも、電話の多さから7月には急ぎょ19人態勢をつくることになりました。

同じように粗大ごみの有料化を実施した、堺市・枚方市・京都市など近くの自治体が経験した対応を研究し、それらの前例から考えて、申し込み件数の増加は



もう少しゆっくりしたカーブで増えるだろうと予測していたのが大外れで、市民の皆さんの電話がなかなか繋がらず最長5分待ちになったという現実から、緊急に受付態勢をやり直

したというわけです。

粗大ごみの料金については、300円、600円、1200円、1800円の4段階にしましたが、これは収集経費の3分の1に当たる負担です。

出し方についてはこれまでとまったく変わらないが料金のシールを郵便局やコンビニなどで購入し貼ってもらうことが新しい

出し方としてお願いしなければなりません。もちろん、料金のシールははがしたりしないよう、はがすときにちぎれやすいとか、めくってもめくり跡が残るようにシールに工夫をこらしています。

——こうしたうら事情も話しながら新しい粗大ごみ収集の制度についておおよその説明があり、続いて質問に入りました。

「粗大ごみ収集有料化にともない不法投棄が増えないかどうか予想していますか」——ごみ袋を有料化したときにも大して不法投棄はありませんでした。近隣の自治体では、箕面市で不法投棄が多かった話をききますが、不法投棄しやすい場所が多くあるからではないかと見えています。その他3件の質問がありました。

(奥野)

### リサイクル交流センターで不用品リユースバザー

5月27日の土曜日から、毎月末の土曜日の朝10時から開かれるリサイクル交流センターの「不用品リユースバザー」に参加しています。

初めて参加した日は、お客が来るのかしら？ どんな人が？ どんなものが売れるのだろうか？ 値段はどれくらい？——などの不安なオープンでした。

10時前には少々行列ができていました。それぞれ家にある不用品を持ち込み10円～300円ぐらいの値をつけました。品物の中にサッカー関係の雑誌が5冊ありましたが、全部まとめて買ってくれました。どんなものが売れるかが次第に分かってきました。

まとめて段ボール箱にいれ「ただで差し上げます」とか、均一で「10円」「50円」「100円」とかに整理したほうが売るのが楽でした。

売り上げよりリユースのほうに重点を置き「使ってくださいならどうぞお持ち帰りを」という気持ちでやりたいと思いました。季節に合わせてタイムリーな品物を出品することや、値段がすぐ分かるような工夫とか、値引きにも快く応じるなど、色々学びました。

今後も出店を続けますので、不要になった物などありましたらご協力をよろしくお願いします。

(今井文子)

## ♪とよなか市民環境会議 2006年総会を開催しました♪

6月21日(水)とよなか市民環境会議2006年度総会を豊中市立市民会館で開催しました。今年度は、活動方針・計画案の中に顕彰制度の検討などを盛り込み、市民・事業者の環境活動の活性化に向けて新たな活動を進めていきます。

また、その一環として、今年度から豊中市環境報告書「とよなかの環境Ⅰ(2005年度活動実績)」に、構成団体の環境への取組みを掲載します。市民団体・事業者の環境活動の情報交換・活動促進にも役立てていただけます。ぜひ新しくなった「とよなかの環境Ⅰ」を手にとりご覧ください(9月9日公表予定)。

### 環境学習都市・西宮に学ぶ!!

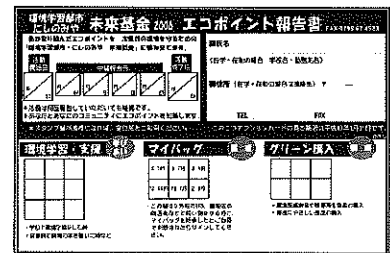
～小川雅由さんを講師にお迎えして～



合同総会に先立ち、特定非営利活動法人こども環境活動支援協会(LEAF)の小川雅由さんを講師にお迎えして「次世代からの預かり物『持続可能なまち・とよなか』へ向けて」をテーマに講演会を開催しました。

小川さんからは、NPOが企業・学校・行政と連携しながら地域における環境学習を進めてきた西宮市の豊富な事例を具体的にご紹介いただきました。

学校や企業を巻き込んだユニークな取組み、「エコカード」。子どもたちが環境学習や活動に参加すると、地域の団体や販売店、学校の先生からスタンプをカードに押しもらえます。エコポイントを集めていくとエコレンジャーとして認定されるしくみで、それが子どもたちのやる気につながり、環境活動への継続的な参加を促進しています。



エコカード(一部抜粋)

また、小中高等学校の環境学習プログラムを約30の企業や事業所が作成・実施することで、企業の環境活動と学校教育をつなぐプロジェクトにも取り組んでいます。子どもたちだけではなく、企業や学校関係者にとっても新しい気づきや学びの場になっているとのことでした。

会場からは、小学校と中学校での環境学習の受け入れ態勢の違いや、西宮市の7年間の取り組みが子どもたちにどのような影響を与えているかといったことに関心が寄せられていました。NPO・企業・学校・行政がそれぞれの持つノウハウや資源を活用して行う地域ぐるみの環境学習の重要性と、持続可能なまちづくりに向けてのヒントが満載の講演会でした。

### ★第8回とよなか環境フォーラム開催★

日時 9月9日(土)午後1時30分～午後4時00分

場所 とよなか男女共同参画推進センターすてっぴ「すてっぴホール」

参加費 無料

◆ 詳細は広報9月号でご案内しています。たくさんの参加をお待ちしています!

## 環境学習メニューPRで色々な出前講座

「環境問題での学習会に講師を派遣します」のPRをつくり、どのような学習内容が考えられるかメニューも書いて各団体などに配ったところ、今まで色々とお出前講座の依頼が来はじめています。

さわ病院のデイケアセンターに通所している患者さんを対象にした8月8日の出前講座は「地球にやさしい生活、省エネで家計も節約」をテーマにしておこないました。この日の参加者は35人。全員に赤と青のカードを配り2択の設問に答えてもらうなどでの進行です。

生活部会の2人の講師は、参加者の反応を気にしながら、掛け合いで質問をだしたり答えに関連して事例をあげたりの説明をおこないました。クイズ風

の問いかけにみんなは興味を持ってよく耳を傾け、質問にさっとカードを挙げて反応してくれます。



「夏の冷房温度を28度に設定しましょう」「設定温度を1度高めにするのが大切です」と話すと「1度でどれくらいの電気代の節約になりますか」と鋭い質問が出ます。「冷房温度を1度控え目にとすると夏の間で665円の節約です」（省エネルギーセンターの資料から）と解説。こうしたやりとりで硬さもほぐれ、和やかな雰囲気の中に1時間

間あまりの持ち時間がたちまち過ぎました。

最後に電気炊飯器は使わないときでも待機電力が流れていますと現物を持ち込んで説明、これも強く興味を惹いたようでした。（奥野）

### 編集室から

▼「異常気象」と言うのが今や時々のあいさつのようになってきた。政府の河川関連の雑誌で見た異常気象の論文で「異常寡照」の新語を発見。日照時間不足のことだが、その結果世界の穀物生産は去年より約10%減少するだろうと予測。地球温暖化の深刻さが迫ってくる感じである。（Z）

▼7月末水生生物観察会に48名参加。滝道は木の緑とカワムツのむれで暑さ知らず。30分で到着。気温24℃ 水温18℃ 水量は多め流れは速く水は冷たい。生物の種類や数は昨年より少ない。雨で流されたのか。水辺の岩にネジバナ、ハグロ草が咲いている。真夏に森の恵みを実感できた一日でした。（H）

▼夏場の炊事は厳しい仕事だと思う。現在住んでいる借家は台所の換気扇の位置が低く、天井にたまった熱

気を外へ出せない。住宅の設計は省エネの大切な要素だと、この夏もまた実感しながら台所に立つ。（Y）

▼毎朝公園を通ると、360度からセミの大合唱！最初は暑苦しく思っていたのですが、最近では圧倒されるようなセミの声を心なしか爽快に感じ始めました。店頭ではブーツなど秋冬物が並びはじめる中、季節の移り変わりを五感で楽しんでいきたいです。（M）

▼季節の移り変わりを道端に咲く花や木の葉の色、飛び交う虫などで感じ、そんなことを挨拶や日常会話の中で共感しあっていたはずですが、そんな身近な自然がなくなったり、教えてくれる人がいなくなったり、ついには異常気象で誰もが知る常識でなくなっていくのは寂しい限りです。（J）

▼豊中まつり、サロンの自然工作。まず、金やすりで竹の角をこすって丸くする。ゴシゴシ！ゴシゴシ！人気は竹の車。車輪をつければ走ります。色を塗ったりサインを入れて、間伐で出た竹や木の枝が子どもたちの手で個性的な作品に生まれ変わりました。（P）

### ご寄付へのお礼

5月、6月に、アジェンダの活動に対して温かいご寄付が寄せられました。

・連合大阪豊中地区協議会様 69,500円  
・匿名 18,236円

ありがとうございました。

《広報チーム》

Z奥野、H岡、Y小村、N三宅、M農本、J井上、P大村

<http://www.5b.biglobe.ne.jp/~toyonaka/>  
Eメール [ecoshimin@kmd.biglobe.ne.jp](mailto:ecoshimin@kmd.biglobe.ne.jp)